

Q 講話をするときに、気を付けてきたことはどんなことですか。

A 教育活動として計画的に行われている「全校朝の会」。その時間の中での校長としての講話（お話）は、子どもたちにとっては授業そのものであり、「授業で勝負する」教師同様、校長は「講話（お話、挨拶）で勝負する」と思っていました。

さて、朝礼でのお話や会議等での挨拶で記憶に残る出来事（言葉）があります。

新任校長として初めてのPTAの会議での挨拶、自分の教育観や学校経営方針について、知っていただきたいという気持ちが強かったのか、時間など気にもしないで話を行いました。

会議終了後、PTA会長から、「校長先生、話が長すぎるし、早口で、PTA新聞への原稿が作りづらいです。」との笑顔での一言。

一方、異動した学校で当時5年生だった男児から「校長先生、一つお願いがあります。それは、全校朝の会の時、できるだけお話を短くしてください。」と、これも笑顔での一言がありました。

小説家、放送作家でもあった井上ひさしの語録に、「難しいことを易しく 易しいことを深く 深いことを面白く」という言葉があります。二人の本音から、井上ひさしのその言葉に、「できるだけ短く」という言葉を付け足して、「挨拶」や「講話（お話、挨拶）」を行うときの心得としてきました。

また、大切にしてほしいことを一文字（絆・考・働など）に示したり、身近な話題を引用したり、具体物（田植えの時期、田んぼに投げ捨てられた空き缶など）を示したりしながら講話を行ってきました。

「挨拶は3分以内。お話は5分以内。それ以上話すと、講演になる。」と話された先輩もいました。聞く側にとってよりよい5分間となるよう、また、自らのコミュニケーション力を高めるため、地域や子どもたちの実態や特色を踏まえながら、講話という授業づくり、教材づくりに努めたいものです。

校種

小学校